



平成27年7月21日(火)  
校長通心 No.48 校長 馬渡教二



**奈々子に** (吉野 弘)

赤い林檎の頬をして  
眠っている 奈々子

お前のお母さんの頬の赤さは  
そっくり  
奈々子の頬にいつか  
ひとつのお母さんの  
つややかな頬は少し青ざめた  
お父さんにもちょっと  
酸っぱい思いがふえた

唐突だが  
奈々子  
お父さんは お前に  
多くを期待しないだろう  
ひとが

ほかからの期待に応えようとして  
どんなに  
自分を駄目にしてしまうか  
お父さんは  
はっきり  
知ってしまったから

お父さんが  
お前にあげたいものは  
健康と  
自分を愛する心だ

ひとが  
ひとでなくなるのは  
自分を愛することをやめるときだ

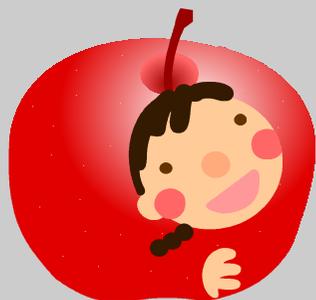
自分を愛することをやめるとき  
ひとは

他人を愛することをやめ  
世界を見失ってしまう

自分があるとき  
他人があり  
世界がある

お父さんにも  
お母さんにも  
酸っぱい苦勞が増えた  
苦勞は  
今は  
お前にあげられない

お前にあげたいものは  
香りのよい健康と  
かちとるにおづかしく  
はぐくむにおづかしい  
自分を愛する心だ



**終わりの中に潜む始まりを感じながら…今こそ再スタートの時！！**

FIFA女子ワールドカップ・カナダ2015が、この間幕を閉じた。世界の中でファイナリストの2チームだけが立てる決勝のピッチ。点差が開いてしまってもライバルアメリカに食らいつき最後まであきらめず戦う姿に「誇らしさ」を感じた。試合終了までピッチの選手はもちろんベンチメンバーも誰一人として下を向く選手はいなかった。初戦で骨折した安藤選手が帰国。その後、彼女のユニホームを着せたシロクマをベンチ入りさせ、あくまでも23人全員で闘う姿勢。宮間選手の女子サッカーをブームから文化に根付かせたいという強い意志。澤穂希選手のベンチで見せる後ろ姿。(準決勝のイングランド戦で延長に入る可能性を感じ率先してアイシングを準備する姿があった…)予選リーグから苦しい試合を勝ち続けることで何かをつかみチームが進化していく…**決勝トーナメントに入ってからインタビューでは、「最高の仲間…」「仲間を信じる…」「仲間のために…」「絶対やれる…」**…そういう言葉が連呼した。誰かを思いやる気持ち。仲間を大切にすること。誰かが困っていたら支える強さ。このメンバーとともっとサッカーをしたいという思い。…**決勝戦前「この23人だからこそ、ここまで来れた」と全員が口をそろえて笑顔で話す姿に「なでしこジャパン」の「真の絆シャフトMAX」を感じた気がする。**誰が欠けても成しえなかった準優勝(朝会の集団の力「ジグソーパズル」を思い出せ)…市川中のどのクラスも3月には到達したい絆シャフトの領域である。

昨日までの三連休、県大会出場メンバーは本当にご苦勞様でした。堂々の野球、サッカーの第三位、おめでとう！！そして、東北大会出場を決めた卓球女子の市村さんはさらに自分を進化させて、もう一踏ん張りしてきてほしい！！

そして、先週金曜日の熱い熱い合唱コンクール。お疲れ様！！各クラスとも様々なドラマを共有し、そして乗り越え、学級集団として確実に一歩前進し成長を遂げたと確信している。「**負けたときこそ学級が試される**」とき！…だと思ふ。**負けて集団の結びつきが深まるなら本物の絆シャフトである。**勝ったところは、勝ったという事実だけで「まとまる」ことができる。喜びや感動を分かち合えたのだから当然のことである。達成感だつて満たされる。だからこそこの学級も「勝ちたい！」と願って取り組んだのが合唱コンだったはずである。しかし、勝ち負けだけを最終到達地点として位置づけていけば、最後まで勝ち続けない限り満足感や安心感を得られなくなってしまう。学級集団に限らず、いつかは何かで負けるのが世の中の常である。だからこそ、**結果や勝つ喜びだけでつなぎとめられてきた集団は、もし、勝てなかったら「脆さ」で崩れてしまうこともあるかもしれない**…喜びを分かち合うことも確かにかけがえのないことだと思ふけれど、**本当につなかりを強くするのは、悔しさや悲しみや辛さを共有し、支え合うことのできる仲間だと思ふのだ。**それまでの取り組みの中で、**そして敗北の中で見つけた「宝」こそが、次のステップへの希望となりえる**ような気がする。今日で1学期が終了するが、ひとつの終わり・ひとつの区切りはもうひとつの始まりを意味していると思う。終わりの中に潜む始まりの中で、人は成長を遂げていくのだと思ふ。そういう意味で、今こそ再スタートの時かもしれない。今こそ切り替えのスイッチをいれる時なんだと思ふ。

そこで、「夏休みだあ〜」と一息つこうとしているみんなに、あえて「**夏休みで差をつけろ!**」を贈りたい！3年生にとってはまずは受験に向けて…とかく人は追い込まれてからやることが多い。しかし、早い段階から頑張っているライバルはいっぱいいる。学習会や実力テスト、高校体験入学。やることはいっぱいある。体育祭に向けても同じである。2学期が始まってから焦っているようでは遅い！ライバルたちに差をつけるなら夏休みである。1~2年生でいうなら部活動だつてそうである。新チームになって急成長を遂げる今こそ、集中的に自分を追い込む時期である。自分の限界に挑むときである。合唱コンクールに向けてもそうだったように…もちろん体育祭に向けた取り組みも、**日々一歩一歩の積み重ね**である。普段の学級生活そのもののように…その取り組みの中に自らの人生を重ねながら一歩一歩しっかりとした足跡を残すことの出来るそんな生き方の出来る人間に成長してほしいと願う。

もう一つ、明日から夏休みでしっかり心に刻んでおかなければならないこと。それは、一人一人が学級集団から離れ自分自身と向き合う33日間であるということだ。例えば…スマホを手に入れたいと思つたとする。例えば…真夜中コンビニや友達の家に来ようという連絡が来たとする。…もちろん、中学生だから、誰もが頭の中ではダメなことだと正しい判断ができています。普段の学校生活だったら、集団の力が働くと先生方との信頼関係でルールを守って行動しなければならないと正しい行動で生活できるけれど、もしかしたら、夏休みは自分のわがままを通してしまふかもしれない。…これでは、「夏休みで差をつけろ!」どころじゃない。こんなとき、親をはじめとした周りの大人たちが「我慢させる経験や機会」を奪わない(だだをこねさせて思いを通させない)「愛情」で接してくれるかどうかは大切な環境になると思う。**叱られるのは誰でも嫌なことだけれど、きちんと叱ってくれる親や大人が周りにいてくれる人は「最高に幸せ者」だ**ということである。それでは、2学期始業式に「夏休みに差をつけた手応え」を持って、全員が元気にこの場所に集まってくることを願っている！！

校内合唱コンクール  
金賞…3年1組「信じる」2年1組「友～旅立ちの時～」  
1年3組「大切なもの」  
銀賞…1年2組「マイバラード」3年2組「名づけられた葉」  
指揮者賞…1年吉田菜摘さん、2年長谷龍之介君、3年甲田詩乃さん

夏季大会県大会  
野球…第3位 サッカー…第3位  
卓球女子個人…市村美友さんベスト16(東北大会出場)  
陸上競技2・3年女子1500メートル…牟田葵凜さん5位入賞  
陸上競技2年男子100メートル…熊谷和真君8位入賞

司馬遼太郎の小説に「燃えよ剣」というのがある。剣に生きた男を扱っていて、新撰組の土方歳三を描いた作品である。題名だけみると、チャンバラ物語というような印象を受けるが、実は作者の司馬さんはこの作品で土方の組織学について語り感嘆している。日本人は曖昧で、物事をあやふやにする癖がある。江戸幕府の「二員制」がそうであったように、ひとつの役職に二人の人間が就くと、平常時は、その方が人員の補給に便利かもしれないが、黒船来航などの緊急時には迅速な行動ができない。誰に責任があるのかわからないから誰も解答できず、外国は業を煮やす。そもそも日本というひとつの国の中に、将軍と天皇という二人の統治者がいることが余計に外国を混乱させた。こういった弊害を見抜いた土方は、最初は副組長は二人だったが、片方を名目上だけ偉くて実権は何もない役に就けて命令がひとり人間から発せられるようにした。新撰組は、当時としては最強の人間集団であったが、その機能を裏づけたのは、隊士に対する厳格な決まりごとである。当然それを隊士は嫌がるが、そういった命令を土方は何度も発した。だから土方は新撰組では嫌われ者であった。しかし、もし土方が隊士からの評判を気にして命令を出さなくなったら、どうだろう？その命令は代わりに組長の近藤勇が出さなければならない。組長がみんなの不評を買っていたのでは、組織は動かなくなる。土方はそれを知っているから自ら損な役を請け負ったのである。…思うに、本当にその組織に貢献している者は、嫌われ者が多いのではないだろうか？日本の歴史の中で最も重要な役割を果たしたと言われる徳川家康と大久保利通はどちらかというと不人気なような気がする。

さて、リーダー諸君！！勝負のときがきた！！